

A. Yarranton と W. Petty

松川七郎

19世紀中葉におけるイギリスの土地国有論者 P. E. Dove (1815—73) は、『海陸よりするイングランドの改善』(1677年)¹⁾の著者 Andrew Yarranton (1616—84) を「イギリス経済学の真の建設者」と評価している²⁾。Dove はこのような評価の根拠を必ずしも明確な形で示してはいない。が、おそらくそれは、Yarranton の経済思想の基調に対する共感と、とりわけ Dove 自身の地代論の重要な命題の1つ、すなわち「1国の地代の価値は、全人口中における非農業労働 (non-agricultural labours) の割合いかに依存する」という命題が、Yarranton の上記の主著において歴史的な明証をあたえられている、とかれが考えたこととによるのであろう³⁾。Dove のこういう評価は Yarranton を問題にする経済学史研究者たちの支持をえていないようであるが、筆者がここで Yarranton をとりあげるのは、Dove の評価

1) 以下『改善』と略記する。原書名はつぎのとおりで、本書の内容を物語っている。*England's improvement by sea and land. To out-do the Dutch without fighting, to pay debts without moneys, to set at work all the poor of England with the growth of our own lands. To prevent unnecessary suits in law; with the benefit of a voluntary register. Directions where vast quantities of timber are to be had for the building of ships; with the advantage of making the great rivers of England navigable. Rules to prevent fires in London, and other great cities; with directions how the several companies of handicraftsmen in London may always have cheap bread and drink.* By Andrew Yarranton, Gent. London, MDCLXXVII (1677). XVI+195 pp.

2) P. E. Dove, *The elements of political science. With an account of Andrew Yarranton, the founder of English political economy.* Edinburgh, 1854, p. 402.

3) Dove によれば、Yarranton の経済思想の基調には「誠実」(honesty) という倫理観があるばかりではなく、Yarranton は産業交易の増進の窮極の目的を人民の福祉の向上にありとし、「平和は戦争にまさり、産業交易は略奪にまさり、統治の最善の使命は国内における繁栄の確保と諸外国に対する不干渉にある」と考えた最初の人であって、「戦わずしてオランダを打倒する」という観念は、「重力の法則の発見にも比すべき真理」である、と。Dove, *op. cit.*, pp. 402, 408, 419—20, 447—48. なお、Dove の地代論の上記の命題に対する Marx の批判については、『資本』第3部 第6篇 第37章参照。

の当否を吟味するためではなく、W. Petty (1623—87) にひきくらべて Yarranton を考えるためである。

Yarranton と Petty が同時代者だということは自明である。そして両者は、その経歴において、またその関心において、さらにはほぼ同年に執筆した主著の主題や個々の論題やイングランドの将来についての見とおしにおいて、いくつかの共通点や類似点をもつ反面、これらのおのおののあいだには、いちじるしい距離も存在するのである。筆者はここで Yarranton の生涯と、一読したかぎりでの『改善』の骨子とを素描し、これを Petty のばあいにひきくらべながら、これらの共通点や距離を考え、メモにしておきたいと思う。

I

Yarranton の生涯については、比較的わずかな漠然とした事実が知られているにすぎない⁴⁾。かれが生れたのは中部イングランドの Worcestershire にある Astley 教区の Larford である。かれの家がらはかなり古いようであるが⁵⁾、それ以上のことは不明で、その少年時代についてもほとんど知られていない。ただ、1630年ごろ、かれが Worcester のリンネル商人の徒弟になり、数年間働いたということはたしかである。が、この職業は、「わたしの遠大な希望からすればあまりにも狭くしかつたので、わたしは無断で親方のもとを去り、数年間いなかでくらしした」(p. 193)⁶⁾、とかれはいつている。まもなく市民革命がおこった。Yarranton は、ピューリタン(おそらくは長老教会派)の兵士として内乱戦に参加し、のちに大尉に昇進した⁷⁾。共和国時代の開幕とともに Yarranton は軍務からしりぞくのであるが、その後

4) Yarranton の伝記資料としては、かれの諸著作の随所にある自伝的な記述と、*Calendar of State Papers (Domestic)* のなかの関連事項とがそのおもなものであるらしい。比較的くわしくまとめられたものとしては、S. Smiles, *Industrial Biography*, London, 1863 所収の伝記があるといわれている。以下に述べるところは、とくに断わらぬかぎり、*Dictionary of national biography* および *Palgrave's dictionary of political economy* 所収の Yarranton 伝(前者は Sir E. Clarke, 後者は A. L. Smith 執筆)によっている。

5) *Victoria County History (Worcestershire)*. Vol. IV. p. 231.

のかれは、1652年以降、まず製鉄事業に着手した。その内容は明らかではないけれども、Astley教区のSharpley Poolには、かれが建設したものと推定される熔鋸炉のあとが現存しており、それはイングランドにおける最初の近代的な熔鋸炉だといわれている⁸⁾。この事業を運営するかたわら、かれはWorcestershireを中心とする数多くの河川を測量し、これらを改修したり運河を開掘したりした。そればかりではなく、かれはライ麦の栽培方法を研究し、クローヴァによる土地の改良をおこない、Worcestershireをはじめとする数多くの郡の「地価を倍加」(p. 194)するのに成功した。かれはクローヴァをFlandersから導入したのであって、この土地改良の方法を実地に採用したのは、イングランドではかれが最初であった⁹⁾。

王政復古とともに、Yarrantonもまたピューリタンとして迫害され、王党派の謀略にわざわざされて、逮捕・投獄・逃亡をくりかえし(1660—62年)¹⁰⁾、政府当局者の憎しみの的になった。しかし、かれはこれに屈することなく、1663年には最初の主著『クローヴァによる土地の大改良』(*The great improvement of lands by clover*. London, 1663)を公刊した。そして、その後まもなく、イングランドの「11人の紳士たち」(『改善』「献詞」)から委嘱されて、独・蘭両国に調査旅行をおこない、各国の地勢・気象・国状一般、とりわけ金属製造業・リンネル製造業・毛織物業の技術を視察した。かれが第2次英・蘭戦争における祖国の危機(1667年のChathamの襲撃)の報に接したのはSaxony公国の宮廷においてであり、英・蘭・瑞の3国同盟の締結(1668年)を知ったのはオランダ滞在中のことであった(『改善』「読者への書簡」)。大陸から帰国後のYarrantonは、一種の顧問技師として、イングランドをくまなく歩き、あらゆる種類の技術的改善に従事し、1674年にはアイルランドへも調査旅行を試みた。むすこのRobert (fl. 1677)やLord T. Windsor (1627?—87)の助力をえて、かれが

6) 以下、文中に円括弧に入れて示されるページは、上記(注1)の『改善』のページ数である。

7) 1648年にかれは王党派のある陰謀を摘発するのに成功したという。*Dictionary of national biography*. Yarrantonは1652年に軍務をしりぞいてから死ぬまで「Yarranton大尉」とよばれていた。

8) H. R. Schubert, *History of the British iron and steel industry from c. 450 B. C. to A. D. 1775*. London, 1957, pp. 205—06.

9) G. E. Fussell, *The old English farming books*. London, 1947, pp. 74—76.

10) M. Ashley, *John Wildman, plotter and postmaster*. New Haven, 1947, pp. 172—75.

イングランドの3大河をはじめとする多くの河川の測量や改修に従事したのも1670年代である。そしてこの間、かれが第2の主著『改善』(1677年)を執筆したのは1676年と思われる¹¹⁾。また『改善』の第2部が公刊されたのは、その数年後の1681年であった。名誉革命をまえにした物情騒然たる反動期に、ピューリタンであったYarrantonに対する攻撃が再燃した。かれは、王政復古以来自分に加えられた謀略や非ぼうを反駁するいく冊かのパンフレットを書いた(1681年以降)。晩年のかれの身边は平穏ではなかったらしい。高名な伝記家のJ. Aubrey (1626—97)によれば、「Yarranton大尉は[1684年の]3月ごろに死んだが、殴打されたうえ、水槽に投げこまれたのがその死因であった」¹²⁾という。Yarrantonは、おそらく私刑に類するしかたで殺害されたのであろう。

II

Yarrantonの主著『改善』(1677年)が、第2次オランダ戦争・3国同盟・第3次オランダ戦争という切迫した情勢のもとで著者の頭脳に熟した思想の所産であるということは、上述したところからもうかがえる。そして本書は、その自然的諸条件のゆえに、オランダと戦争しても勝味のないイングランドが(pp. 1—6)、「戦わずしてオランダを凌駕する」にはどうすればよいか、ということを中心的な主題にしているのである¹³⁾。この意味でYarrantonは、Sir W. Temple (1628—99)などと同じようなオランダ凌駕論者といえるが、同時にかれは、イングランドによるフランスの凌駕をも考えているのであるから(「読者への書簡」)、本書の主題は、ほぼ同年に完結したPettyの主著『政治算術』(1690年)のそれと実質的には同じだ、と考えてさしつかえなからう。ところで、Yarrantonによれば、王国の富および力の基礎は産業交易(trade)であり、産業交易の一般原理は「誠実」(honesty)であって、この誠実あってこそ、富もまたありうるのであるから、名誉・誠実・富・力・産業交易は5人姉妹にたとえられるべきものである。そして、戦争は富および産業交易の破壊者なのであるから、「戦わずしてオランダを凌駕する」ことは、まさしく正義にかなった道であり、またそれは産業交易の改善にほかならない(「献詞」, 「読者への書簡」, pp. 6, 37—38)。しかもかれにとっては、上述の生涯からもうかがわれるように、「イングランドの改善は多年の研究のすべて」(「献

11) 『改善』の公刊が認可されたのは1676年10月4日づけである。

12) J. Aubrey, *Brief lives*, ed. by O. L. Dick. London, 1950, pp. xxv—xxvi.

13) このことは書名にも明記されている。

詞)なのであって、本書においては、それがさまざまのプロジェクトの形で論じられているのである。

Yarranton の論述には重複や脱線がきわめて多い¹⁴⁾。が、論旨は必ずしも不明確ではない。5つの主要なプロジェクトに即してかれの論述を要約することにしよう。

第1のプロジェクトとして提案されているのは、産業交易の基礎(つまり上述の「誠実」を実現すべき物質的条件)としての、土地その他の不動産の登記制度(pp. 8—83, 138—43); および土地を保証とする銀行制度(pp. 16—30)である。この提案は、明らかに市民革命以来の土地所有の変革にともなう土地所有権の混乱(pp. 35—37)¹⁵⁾と、とりわけオランダ戦争を契機とする財政難によってひきおこされた国庫支払停止・金匠のあいつぐ倒産等々による信用制度の破壊(p. 17)とをその背景にしている。そして、この両制度は、オランダを模範としつつ、たがいに表裏するものとして論じられているのであって、その骨子は、いっさいの信用の最大の基礎としての土地が、登記制度によって所有権を確立されるならば、土地をめぐる訴訟事件は減少するばかりではなく、地価は上昇し、土地の担保力はいちじるしく増大するであろう。しかもこの土地を保証として銀行が設立されれば、土地の登記証書という紙片が貨幣に匹敵する機能を果し、利率は6%から4%へ低下し、人は貨幣なしに負債を支払うことができ、産業交易は銀行を主脈としつつその基礎をえるであろう、というのである。かれの土地登記制度論が測量家としてのかれ自身の体験にも関連をもつことはいままでもない。

Yarranton の第2の提案は、上記の両制度のうえに、新たに貧民を雇用すべき製造業の導入であって、具体的にいえば、それはリンネル製造業(pp. 44—56, 144—46)と製鉄業(pp. 56—61, 147—49)である¹⁶⁾。このばあい、Yarranton は、上述したみずからの体験に依拠しつつ、主としてドイツの製造業を模範にしている。そのうえ、測量家としても産業技師としても、Yarranton はイングランドの地方的諸事情に精通していたので、これらの製造業の導入の立地や経営についてのかれの提案はきわめて具体的である。かれは、上部ドイツにおいて1

人のこじきにも会わなかった、という。そして、これはこの2つの製造業が子どもにさえその職をあたえているからであって、ドイツでは子どもが父を富ませているのに、イングランドではその反対である、と。さらに、イングランドとウェイルズに40万人の未就業貧民がおり、その1人1日の食料が4ペンスとすれば、そしてかれらがこの両製造業に就業して1人1日8ペンスを稼得するとすれば、けっきょく1人1日12ペンスのプラスになり、両製造業だけでも、年に150万ポンドの利得をあげるのであろう¹⁷⁾、そればかりではなく、両製造業によって就業人口が増加すれば、それだけ海外への人口流失はなくなり、人口が増加すれば人はいっそう勤勉になるから、富もまた増加するであろう、と。

しかしながら、これらの製造業が繁栄するためには、他の諸条件もみたされなければならない。すなわちそれは第3の提案としての、輸入亜麻製品および鉄に対する期限つき(7ヵ年)の保護関税(pp. 62—63, 144)と、第4の提案としての、製造品および農産物の運賃軽減のための内国航行の促進(河川改修・運河開掘)ならびに港湾施設の改善(pp. 64—66, 155—84)と、第5の提案としての、労働貧民に安価な食料を供給し、ひいては製造品を安価ならしめるための穀倉(Publick Bank Granary)の建設(pp. 113—38, 150—81)とである。第4の提案がYarranton の上述の生活体験と関連しているのはいうまでもないが、第5の提案、すなわち水運の便にめぐまれた地点に建設され、豊年に穀物その他の飲料を貯蔵しておき、穀物価格の変動にわざわざされずにつねに潤沢かつ安価に労働貧民に飲食物を供給すべき穀倉の建設は、徹頭徹尾ドイツを模範として詳述されているのである。

以上が Yarranton の5つのプロジェクトの概要である¹⁸⁾。そしてかれは、もしこれらの提案が実行にうつされるならば、イングランドは、蘭・仏両国を凌駕するばかりではなく、「あらゆる方面において世界きっての偉大な国民になりうる」(「献詞」というのであって、イングランドの将来についてのこの楽観的な見とおしは、『政治算術』の結論における Petty のそれと軌を一にしているといえよう。

III

ほぼ同年に執筆された Yarranton の『改善』と Petty の『政治算術』とは、以上のようにその主題と結論的な

14) ついでながら、本書のページづけはかなりずさんであって、たとえば72—96ページはページづけからまったく脱落している。

15) これに加えて1666年のロンドンの大火がある。Yarranton はロンドン市の火災防止法を提案している(pp. 67—71)。

16) これに付随するものとして、幼年労働者のための紡績学校(pp. 45—46)、機械職人のための技術の大学(p. 143)の設立が提案されている。

17) この失業貧民数やその生計費の推計については、Eden のてきびしい批判がある。cf. F. M. Eden, *The state of the poor*. London, 1797. Vol. I, pp. 192—96.

18) 1681年に公刊された『改善』の第2部においても、これらのプロジェクトはくりかえされている。

見とおしとを同じくしている。そればかりではなく、Yarranton が『改善』の本論で提案している数多くのプロジェクトのほとんどすべては、『政治算術』においてもまた、その個々の論題をなしているのである¹⁹⁾。そしてそれらのすべてに共通する両者の最大の特徴をつきつめた形でいえば、両者がともに農・林・鉱・水産業および製造業、つまり1国社会の生産力の増進をいちじるしく重視し、それにふかい関心をもっているという点なのであって²⁰⁾、この特徴は、同時に両者を当時のイングランドの代表的な重商主義的著作家たちから区別する標識である²¹⁾、といえよう。またこの関心が、とりわけ産業技術家および測量家という両者の共通した経歴(この点でも両者は上記の重商主義的著作家たちからみずからを区別する)と密接にむすびついていることも疑いない。

ところが、このような共通点をもつにもかかわらず、両者のあいだにははなはだしい距離がある。たとえば、上記の両著作はその主題を同じくしてはいるけれども、これを論じるばあい、Yarranton には、Petty のような科学的方法(政治算術)の自覚もなければ規定もない。また、Yarranton は、土地の登記制度は地価を高めるとはいつているが、そのばあい、地代はもとより、地価の性質、その決定の要因や方法は全然不問に付されている。同じことは、銀行の提案と表裏すべき貨幣や利子の性質についてもいいうる。さらに、救貧とからみあって論じられている製造業の振興や改善の問題はどうかといえ、Yarranton も、それによる遊休の労働力や幼年労働の稼働を力説はしているが、Petty のようにそれを「余利利得」(剰余価値)の問題にまで掘りさげてはいない。Petty は保護関税を提案しつつも、その反面において自然法思想にもとづく自由貿易論を述べているが、Yarranton にはそれが無い。イングランドの将来を樂觀するという点で両者は一致しているが、Yarranton の樂觀は、Petty のように各国の富を社会的生産力の観

点にたつて統一的に観察したり、理論的に分析したり、実証的に比較したりしたうえでのものではない。このような特徴のゆえに、Yarranton は、D. Defoe (1661?—1731) が“*The Projecting Age*”²²⁾と名づけたこの時代の典型的な人物²³⁾としてとどまったのであろう。

それはともかくとして、両者のあいだに存在する距離、つまり社会経済現象の観察における統一的な視点や、全体認識の理論や、その本質の洞察のふかさやについての Petty の優越は、なにに由来するものであろうか。結論的にいえば、それは類似点をもちつつもなおいちじるしい差異をもつ両者の経歴に、いいかえれば Petty にあって Yarranton にはない経歴の差異ならびにそれとこの時代の社会的基盤との関連にもとめられなければならないであろう。そしてこの点を追究することは、同時に17世紀のイングランドにおける古典経済学の基礎理論の萌芽と近代統計学的方法との形成の社会的諸条件を、いっそう明らかにするための目安の1つになるであろう。

22) D. Defoe, *An essay upon projects*. London, 1697, p. 1.

23) Yarranton の「無数」とさえいわれているほど数多くのプロジェクトのおのおのについては、いずれも先行者があるといわれている。A. L. Smith, *Andrew Yarranton*. (*Palgrave's dictionary of political economy*. London, 1901, Vol. III, p. 682.) なおこの点については、Eden, *op. cit.*, Vol. I, pp. 197—226; W. Cunningham, *The growth of English industry and commerce in modern times*. Vol. II, pp. 317—18, 532—33, 572—73; Lipson, *op. cit.*, Vol. II, pp. 61—62, 435—36, Vol. III, pp. 444—46, 484—85; J. N. L. Baker, *England in the seventeenth century*. (*An historical geography of England before A. D. 1800*, ed. by H. C. Darby. Cambridge, 1951) pp. 423—26, 430; W. R. Scott, *Joint-stock companies*. New York, 1951. Vol. I, p. 293; D. Ogg, *England in the reign of Charles II*. Oxford, 1934, Vol. I, pp. 40—41, Vol. II, p. 441; E. A. J. Johnson, *Predecessors of Adam Smith*. London, 1937, pp. 246—47; E. Whittaker, *A history of economic ideas*. London, 1940, p. 289 を見よ。したがって、Yarranton は、上記の箇所でも Smith がいつているように独創家というよりもむしろ翻案家であり、先行者や同時代者の個々のプロジェクトをきわめて多面的にまとめたという意味で、まったく特異な存在であつて、このプロジェクトという点で、かれはドイツからも影響をうけたのであろう。Cf. E. F. Heckscher, *Mercantilism* London, 1934, Vol. II, p. 127. しかも Yarranton のプロジェクトはおおむね健全なものであつて、それは18世紀以降においていちじるしく発展した社会的生産力の有効な諸要素を整備するという問題に関連をもっていたのである。Cf. Johnson, *op. cit.*, p. 275.

19) 唯一の例外は、上述の穀倉の建設の問題であらう。が、この問題の重要な眼目の1つは中間商人による穀物の投機やそれによる穀物価格のつりあげの防止にあつたのであるから (E. Lipson, *The economic history of England*. London, 1948. Vol. II, pp. 435—36), これを中間商人の排除という問題として考えれば、Petty もまた力説したところである。

20) Yarranton が、中間商人の排除とならんで、不生産的職業としての法律家および僧職者を問題にしている点も注目すべきである (p. 195)。

21) Yarranton が国内における製造業を重視し、その保護のための関税の創設を提案している点に着眼すれば、かれは大陸流の重商主義者だといえよう。